「環境に関する意識と行動の調査」結果

2011 年 2 月

調査主体：生活環境研究会（水俣研究班）
（代表：小松 洋　松山大学人文学部教授）

先日は、私どもが企画しました標記調査に御回答いただきき、誠にありがとうございました。皆様の御理解により、貴重な調査結果を得ることができ、深く感謝しております。

このたび、調査結果のお知らせを作成いたしましたので、ご覧いただければ幸いに存じます。この小冊子は、主な項目について集計結果を要約したものです。最終頁に「まとめ」がありますので、お忙しい方は、その頁だけでもご覧ください。なお、今後、さらに詳しい分析を行う予定でおります。また、これらの結果に関する記者発表も行う予定でおります。今後の発表資料などはホームページに掲載しますので、ご覧いただければ幸いです。

【生活環境研究会（水俣研究班）】

今回の調査主体である生活環境研究会（水俣研究班）は以下のメンバーで構成されています[1]。

研究代表者：小松 洋（松山大学人文学部教授）
事　務　局：篠木幹子（中央大学総合政策学部准教授）
研究分担者：阿部晃士（岩手県立大学総合政策学部准教授）
　　海野道郎（東北大学総長特命教授）

【生活環境研究会ホームページおよび連絡先】

ホームページ　http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~komatsu/index1.html
連絡先　〒790-8578　愛媛県松山市文京町 4-2　松山大学人文学部小松研究室内
TEL：089-926-7309（小松 洋研究室）e-mail: komatsu@cc.matsuyama-u.ac.jp

内容をご覧いただくにあたって

1）各グラフの数字は、とくにことわりがない限り、本調査にご協力くださった生徒さんと保護者の皆さまの 257 組の集計に対するパーセントです。ただし、小数点以下は四捨五入しています。また、非常に小さい値（パーセンテージ）は表示していませんので、合計は必ずしも 100%にはならないこともあります。
2）図では、スペース上の制約から、男子、女子生徒の割合などについてのみ図示しており、全生徒の割合を示していないものもあります。男子と女子はほぼ同数なので、**「全生徒」は「男子」と「女子」の中間を取った値**となります。
3）文中の**「差がある」、「関連がある」といった判断は統計的検定に基づいていますが、ここでは数値を省略しています**。その理由は、（1）資料として煩雑にならないよう読みやすさを優先したこと、また、（2）本調査のような全数調査では統計的検定が不要だという考え方もあるためです。
4）わからない／答えない（Don't Know / No Answer）回答は除いて分析しています。
5）複数回答とは、「あてはまるものをいくつでも選んでください」という形式の問です。
6）他に引用される場合は生活環境研究会までご連絡ください。

[1] 本稿作成過程で土場学氏にコメントをいただいた。

１．調査の概要

1.1　調査の目的

生活環境研究会では、1988 年から環境問題に関する調査研究を続けている。今回、学校や家庭での環境問題に関する取り組みについて生徒の皆さんがどのように感じているのか、また、普段の生活で環境にやさしい行動に皆さんがどのくらい取り組んでいるのかなどを明らかにするための調査を企画した。調査分析をとおして、中学校の環境教育や水俣市の環境政策、また、多くの市民の皆さまにとって役立つ結果を出すことを志している。

1.2　調査の方法と回答数

水俣市内の全中学校 7 校の中学 3 年生全員（266 名）とその保護者を対象として調査を実施した。保護者と生徒の両者に回答していただく点がこの調査の特徴であり、全国の環境教育に関する調査の中でも貴重な調査となっている。調査票は学校で配布し、記入した調査票は回答者自身が封筒に厳封し、それを学校を通して回収した。2010 年 11 月 1 日（月）から 11 月 12 日（金）の間に、生徒・保護者の皆さま 257 組の方から回答が寄せられた。

1.3　回答者の特徴

（1）回答者の内訳

回答者は全体で 257 組の生徒と保護者である。生徒は 255 票、保護者（男性）は 184 票、保護者（女性）は 233 票であり、その組み合わせが全体で 257 票となっている。生徒の調査票はないが保護者の調査票はある、生徒の調査票はあるが保護者の調査票はないなどさまざまな組み合わせがあるが、本報告ではこれら 257 組の調査票を用いて分析を行っている。

表 1.1　回答者の内訳

全体	生徒	保護者（男性）	保護者（女性）
257 組	255 人	184 人	233 人

（2）生徒の性別と保護者の年齢

生徒の性別についてみてみると、男子生徒 50%、女子生徒 50%で、ちょうど半々になっている。保護者については、表 1.1 に示したように、女性のほうが男性よりも回答者数は多い。また、年齢に関しては、男女ともに 40 歳代の保護者が最も多くなっている。

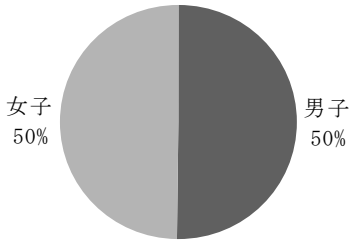

図 1.1　生徒の性別

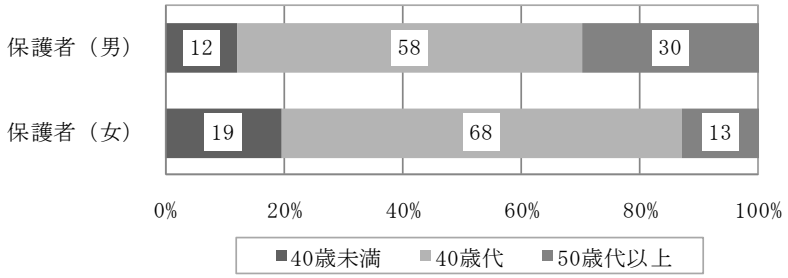

図 1.2　保護者の年齢

２．環境学習の現状

2.1　環境学習の取り組みの状況

水俣病に関する学習には生徒の半数以上（53%）が「一生懸命に取り組んでいる」と回答した。教科の中で習う環境問題、総合学習の中で勉強する環境問題、授業以外の時間に行う環境に関する活動・取り組みでは、「まあまあ一生懸命取り組んでいる」との回答が最も多く、順に、61%、53%、49%であった。「一生懸命に取り組んでいる」と併せて、いずれの学習内容も、7 割から 8 割の生徒が『一生懸命に取り組んでいる』ことがわかる。

回答には性差がみられ、例えば水俣病に関する学習では「一生懸命に取り組んでいる」との回答が男子の 48%に対して女子は 58%であり、女子生徒のほうが男子生徒よりも水俣病の学習について一生懸命取り組んでいるという傾向がみられた。また、教科学習、総合学習、授業以外の学習においても、性別と環境学習に関する取り組みに関して、女子生徒のほうが一生懸命取り組んでいる傾向があることがわかった。

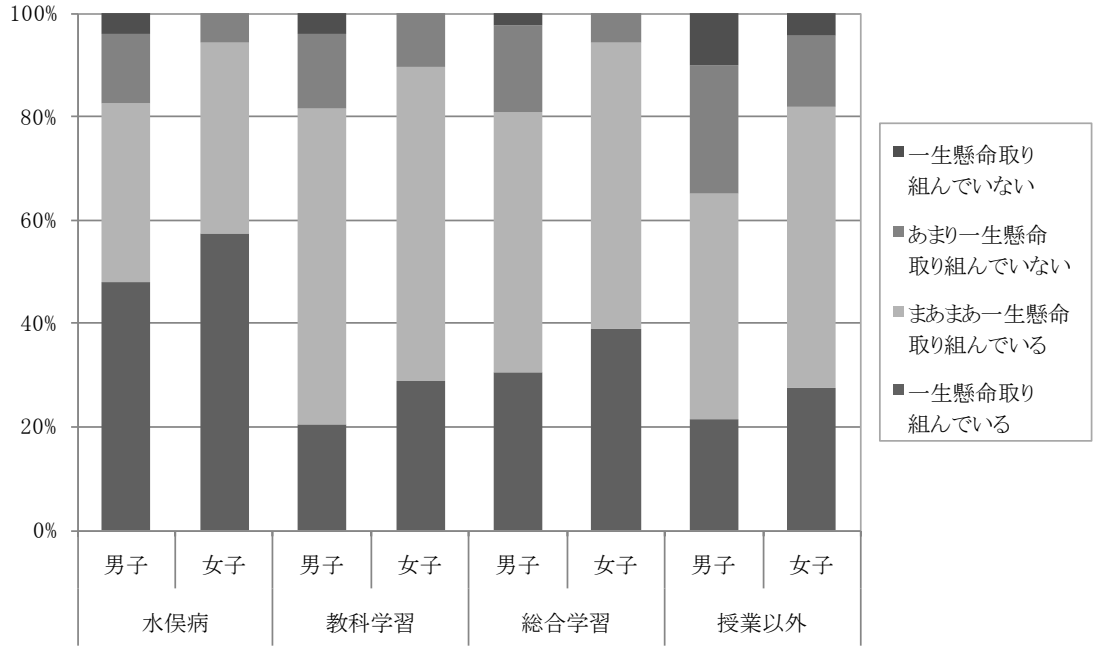

図 2.1　環境学習の取り組み状況

2.2　環境学習の効果と保護者の評価

調査票では、図 2.1 で示したような勉強や活動が、環境問題について自分で考えるきっかけとなったと思うかどうかも尋ねている。図 2.2 を見てみると、水俣病に関する学習がきっかけになったかどうかについては、「そう思う」という回答が 50%で最も多かった。教科の中で習う環境問題、総合学習の中で勉強する環境問題、授業以外の時間に行う環境に関する活動・取り組みでは、「どちらかといえばそう思う」という回答が最も多く、順に、53%、49%、47%であった。前述の取り組みの程度とは異なり、顕著な性差はみられなかった。

保護者票でも同様に、生徒に尋ねた学習内容について、保護者の立場から子どもが環境問題について自分で考えるきっかけになると思うかどうかを質問した。生徒の回答と保護者(男性)の回答とは関連が見られなかった。すなわち、生徒が水俣病の学習が自分で環境問題について考える「きっかけとなったと思う」ほど、保護者（男性）は「生徒が考えるきっかけとなった」と思っているという訳ではなかった。生徒の回答と保護者（女性）との回答も同様に関連がみられなかった。この傾向は他の 3 つの学習内容でも同様であった。

一方、保護者間では、4 つの学習内容すべてで、保護者（男性）が「生徒が考えるきっかけとなった」と思っているほど、保護者（女性）も「生徒が考えるきっかけとなった」と思っている傾向が見られた。

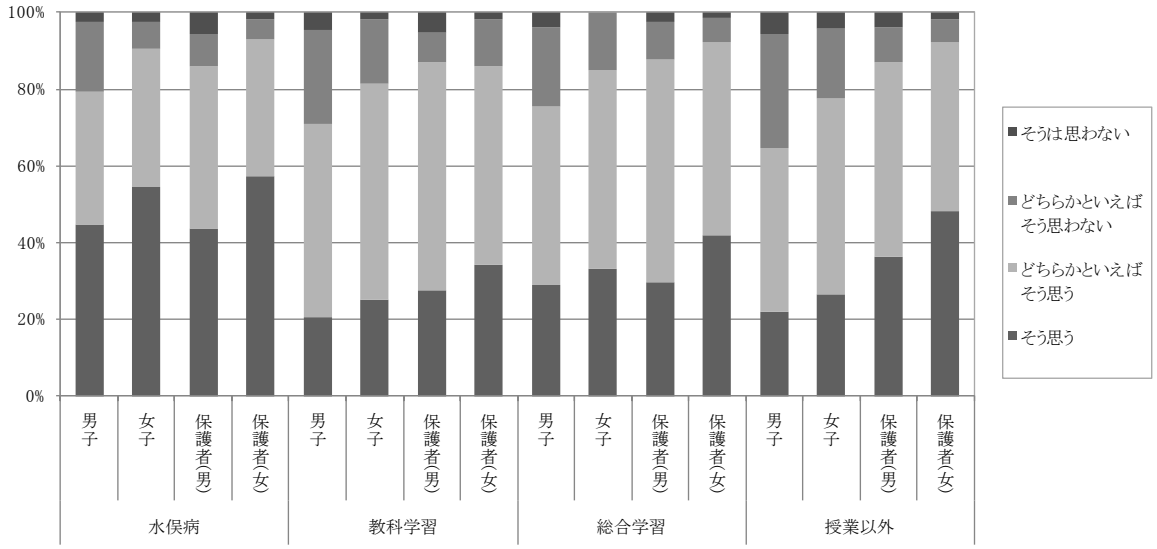

図 2.2　環境学習が自分で環境問題を考えるきっかけになったかどうか

３．生徒が取り組んでみたい環境学習

3.1.これから勉強してみたい環境問題のテーマ

これから勉強してみたい環境問題のテーマを生徒に尋ねた（図 3.1）。生徒が一番関心を持っているテーマは地球温暖化で 66%、次がごみ問題（男女合わせて全体で 38%）であった。ただ、その他のテーマも 30%前後の関心がもたれており、地球温暖化を除いてそれほど大きな差があるわけではない。男女別に見てみると、ごみ問題、地域づくり、生活と環境などは女子生徒の方が、海洋汚染や水質汚濁は男子生徒の方が関心をもっている。また、ひとり何個ぐらい関心を持っているのかをみたところ（図 3.2）、4 つ程度の関心を持っている生徒が一番多く（全体で 29%）、次いで 3 つ（23%）、5 つ（15%）と続く。全体の平均数は 3.2 で、関心を持っているテーマの数の平均は男女で大きな差は見られない（男子生徒：3.2 個、女子生徒：3.1 個）。

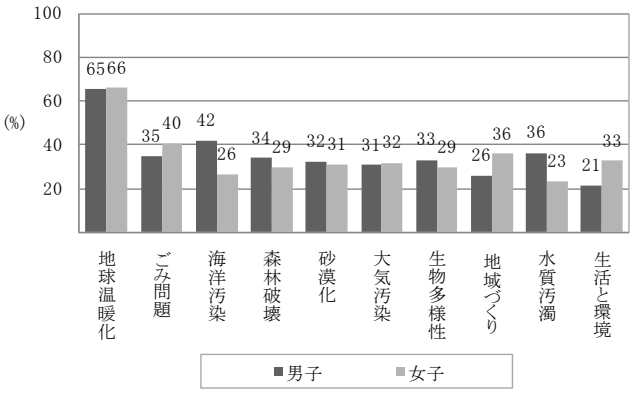

図 3.1　勉強してみたい環境問題のテーマ

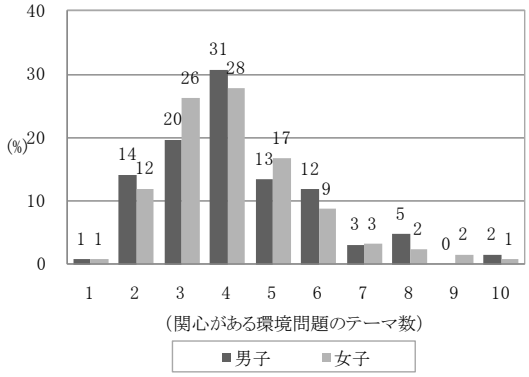

図 3.2　勉強してみたい環境問題のテーマの数

次に、生徒が勉強してみたいと思っているテーマが、（1）科目の選好度と、（2）情報収集の程度によって異なるのかを検討した。文系科目（国語・英語・社会）が好きな生徒は、生物多様性により強い関心をもっている。これに対して、理系科目（数学・理科）が好きな生徒は、水質汚濁、大気汚染、海洋汚染などのテーマに関心をもっており、その他の科目（技家・保体・音楽など）が好きな生徒は、地域づくりに関心をもっていることがわかった（図略）[2]。また、自発的にテレビやビデオ、DVD等で勉強している生徒のほうが、各テーマに対して強い関心をもっていることが明らかになった（図 3.3）。

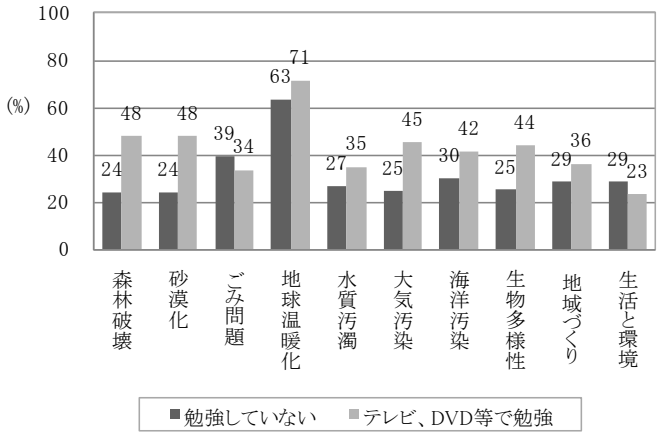

図 3.3　自発的な勉強と環境問題のテーマの関係

[2] 科目選好に関しては、それぞれの科目が好きだという回答に 1 点を付与し、文系科目であれば国語、英語、社会の得点を総和したのち、科目の中央値で文系科目が相対的に好きな生徒と相対的に好きではない生徒、というように分類した。他の科目も同様の手順で変数を合成した。

3.2　環境学習において取り組んでみたい方法

学校で行う環境学習の際に取り組んでみたい方法を中学生に尋ねた。得られた回答を、希望率が多い順に記したのが図 3.4 である。「本やネット」、「海や山に行って自然体験」、「テレビやビデオ、DVD の映像」などが上位を占め、「環境コンクールへの参加」、「クラスで話し合う」などは少ない。既に学校で取り組んでいるものは選ばれにくいのか、それとも他人との直接的接触を伴うものが避けられているのか、今後さらなる検討が必要である。全体的傾向としては性別による差はほとんどないが、女子の方がやや各方法に対する希望率が高い。また、生徒が取り組みたいと思っている「環境学習の方法の数」は、図 3.5 に見るように、3 つが最も多く、2～4 つが大部分を占めている。

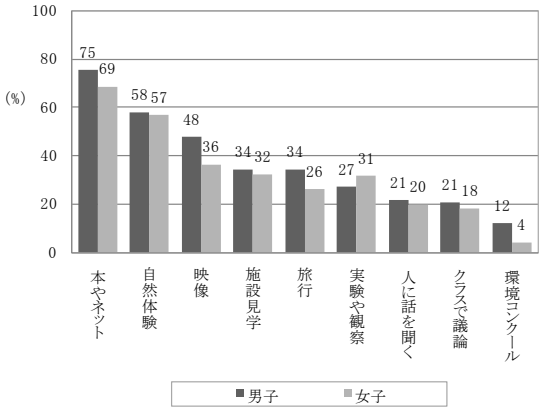

図 3.4　学校での環境学習で取り組んでみたい方法

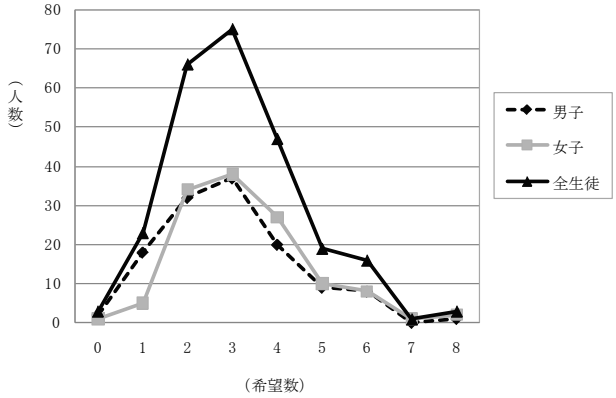

図 3.5　学校での環境学習で取り組んでみたい方法の数

環境学習については、保護者に対しても、「自主的に行った行動の種類」を尋ねた（注：中学生と異なり項目数は 7 つであり、内容の重複も一部のみである）。実施している種類を見ると、特定のものに集中しているのではなく、自然観察会への参加（1 割未満）以外のものについては、2 割前後の人に実施経験がある。1 人当たりの実施平均数はほぼ 1（保護者（男性）1.1、保護者（女性）1.2）だが、何も行っていない人が、保護者（男性）では 5 割、保護者（女性）では 4 割いる。保護者が環境学習に関するさまざまな行動をしているほど、生徒も希望する環境学習の方法をたくさん挙げるといった関係がみられるのか、両者の関連をみてみると、保護者の環境経験実施数が 0 に偏っていることもあって、保護者と生徒の活動度の間には、きわめて小さい相関しか存在せず、ほとんど関連が見られないという結果になった（保護者（男性）と生徒の相関：.043、保護者（女性）と生徒の相関：－.033）[3]。なお、高校生を対象としたこれまでに行われた別の調査では、保護者と生徒間（特に、保護者（女性）と生徒間）の意識に相関が認められることが多いが、今回の調査結果は、水俣市における学校教育の成果を示しているのだろうか。ちなみに、両保護者の間には、中程度の相関（.292）が見られた。

[3] 相関とは－1 と＋1 の範囲をとる統計量（統計的指標）で、関連の強さを表す。0 は関連が無いことを示す。0 から＋1 に近づくほど「正の関連（一方が増えれば他方も増える程度）」が大きくなり、0 から－1 に近づくほど「負の関連（一方が増えたときに他方は減る程度）」が大きくなる。

４．環境配慮行動実行状況とその評価

4.1　中学生の環境配慮行動

中学生が家で行う廃棄物関連行動を見ると、「牛乳パック」以外については半数近くの生徒が「よくする」と答えており、「時々する」をも加えれば 8 割前後の生徒がそれぞれの行動を行っている。「牛乳パック」は、行動の頻度も少なく、主な家事担当者が買い物ついでに行っているものと思われる。図 4.1 には、「よくする」「時々する」と回答した生徒の比率を、男女別で示してある。各行動の実行率については女子の方がやや高いが、特に「ビン等を洗う」については顕著な差が見られ、女子のほうが男子よりも行動していることがわかる。

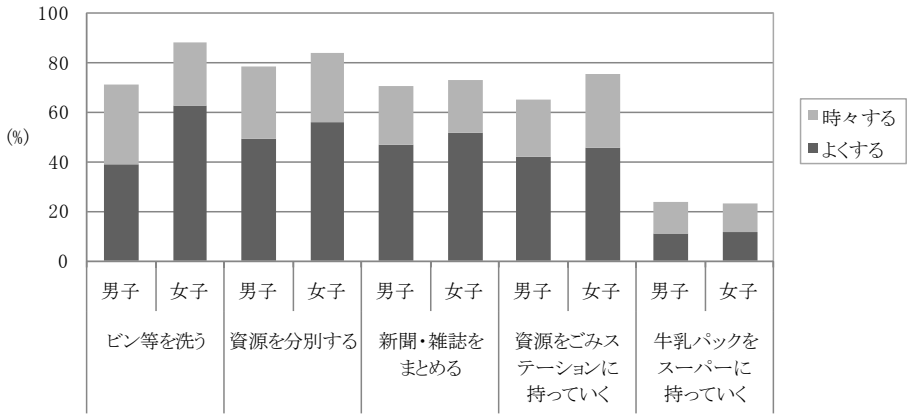

図 4.1　ごみ分別にかかわる生徒の行動

4.2　保護者と生徒の間の対応関係

普段行っている環境配慮行動のうち、生徒の回答で最も実行度が高かったのは「家の中で使っていない場所の電灯を消す」の 78%であった。以下、「歯磨きするとき水を流し放しにしない」73%、「ごみを出さないように食事を残さず食べる」58%、「自分の部屋の冷暖房を控えめにする」55%と続き、次に多い「買い物をしたとき袋をもらわない」51%までが実行率が 50%を超えた行動である。実行率の高いものは、「節約」に通じる行動である。実行率の低いものには、面倒なもの（水筒、ゴミ拾い）や他者との関係を伴うもの（ボランティア）が並ぶ。「エコマーク商品の購入」が少ないのは、エコマークが付いた商品を買う機会が少ないのか、実際には購入していてもエコマーク商品であることに気づいていないのか、検討の必要があろう。一般に女子の方が熱心な傾向があるが、男子の方が高い実行率を持つ行動（食事を残さない、冷暖房を控える）があることには注目すべきであろう。

ほぼ同様の傾向は保護者の回答にも見られ、実行率が高かった行動は「家の中で使っていない場所の電灯を消す（男 86%、女 93%）」、「歯磨きするとき水を流し放しにしない（男 66%、女 81%）」、「自分の部屋の冷暖房を控えめにする（男 59%、女 75%）」であった。「ごみを出さないように食事を残さず食べる（男 59%、女 53%）」までが、男女とも実行率が 50%を超えている。「買い物したとき袋をもらわない」は女性が 72%の実行率に対し、男性は 38%と 5 割を割っていた。

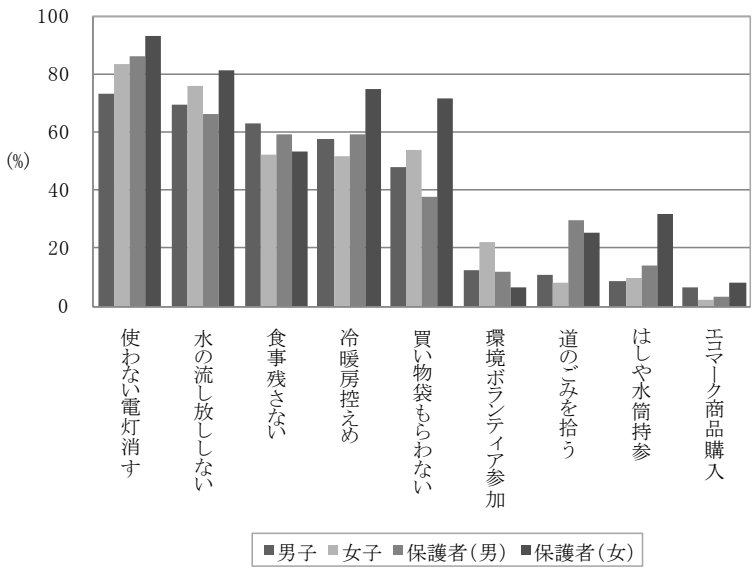

図 4.2　さまざまな環境配慮行動の取り組み

ごみ分別に関する行動について、生徒と保護者の間の相関を調べたところ、あまり大きな関連はみられなかった。全般に、保護者（女性）と生徒の関連の方が大きいが、分別については保護者（男性）との関連の方が大きい。これは、保護者（女性）がほとんど「よくする」に集中しているために生じた、技術的な理由によるものである。

環境配慮行動全般に関しては、個々の行動について、生徒と保護者（男性）の相関、生徒と保護者（女性）の相関（ピアソンの積率相関係数）を計算すると、おおむね小さい相関であった（最大でも 0.232）。また、前者と後者の相関を比較すると、ほぼ同一の値を示したのが 5 項目あり、前者の方が大きいものが 2 項目、後者の方が大きいものが 2 項目で、環境配慮行動における中学生への影響力という観点から見たとき、保護者（男性）と保護者（女性）の影響力が拮抗していることが見出された。

表 4.1　環境配慮行動に関する「親子」の相関

	中学生の行動と保護者の行動との相関		
	保護者（男）	影響力	保護者（女）
冷暖房控え目	0.220	＞	0.094
使わない電灯消す	0.023	≒	0.027
エコマーク商品購入	－0.042	＜	0.108
買い物袋もらわない	0.131	≒	0.086
道のごみを拾う	0.008	≒	0.065
水の流し放ししない	0.054	≒	0.049
食事残さない	0.106	＜	0.232
はしや水筒持参	0.131	≒	0.114
環境ボランティア参加	0.094	＞	－0.026

５．意識と行動の関係

5.1　学校での環境学習にもとづく家庭での行動

図 5.1 は、学校での環境学習にもとづく家庭での行動を尋ねた結果である。「学校で実行している行動を家でも行う」、「勉強した内容を家族に伝える」、「学校で実行している行動を家族にすすめる」の 3 項目について、「よくする」から「まったくしない」の 4 段階で回答してもらった。どの項目でも、「よくする」という生徒は 1 割前後である。「よくする」、「時々する」を合わせると、実行度が高いのは「行動を家でも行う」、「勉強内容を家族に伝える」、「行動を家族にすすめる」の順になっている。男女別で見ると、男子よりも女子の方が多少、環境学習について家族に伝えている傾向がある。

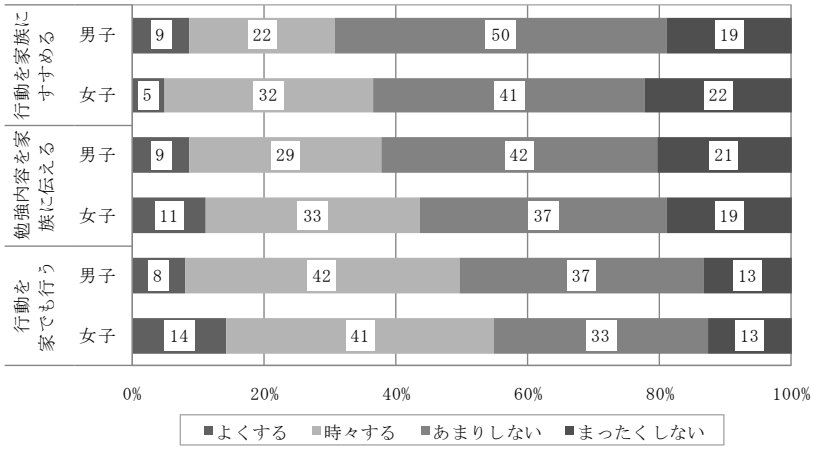

図 5.1 環境学習にもとづく家庭での行動

5.2　家庭における環境問題への取り組み

自分の家庭では、環境問題に対してどの程度熱心に取り組んでいると思うかを尋ねたところ、図 5.2 のような結果になった。一番多いのは生徒も保護者も「どちらかといえばそう思う」という回答で、女子生徒が 61%、男子生徒が 51%、保護者（男性）が 50%、保護者（女性）が 64%であり、「そう思う」という回答と合わせると、7 割前後の生徒と保護者（女性）が家で熱心に環境問題に取り組んでいると思うと回答している。これに対して、保護者（男性）がそう思っている割合がやや低くなっている。

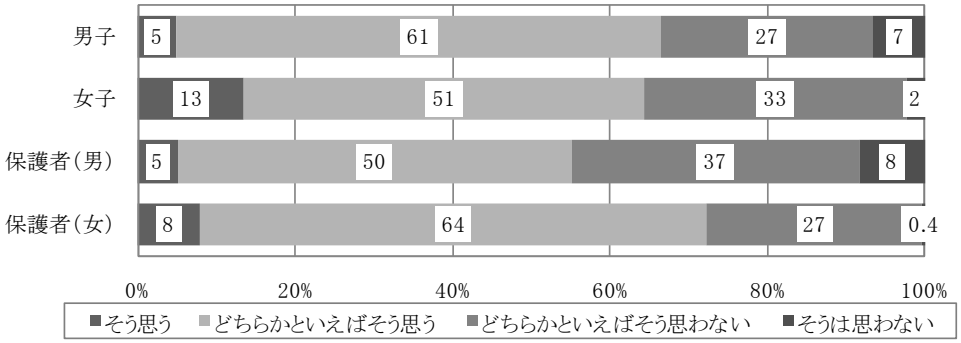

図 5.2　家で環境問題に熱心に取り組んでいると思うかどうか

次に、家庭内での環境問題の取り組みに関する保護者の認知と、家庭内で環境問題に熱心に取り組んでいると思うかどうかの生徒の認知がどのように関係しているのかを検討した。家庭内での環境問題に関する取り組みは、(1) 家族とごみ分別の役割分担について話し合う、(2) 環境問題について自分が得た情報や内容を子どもに教える、(3) 家族でごみ問題や環境問題に関するテレビや映画をみる、(4) 家族でごみ問題や環境問題について話し合う、の 4 つである。いずれも、保護者（女性）のほうが家庭内で各取り組みを行っているという認知を持っていることがわかる[4]（図 5.3）。

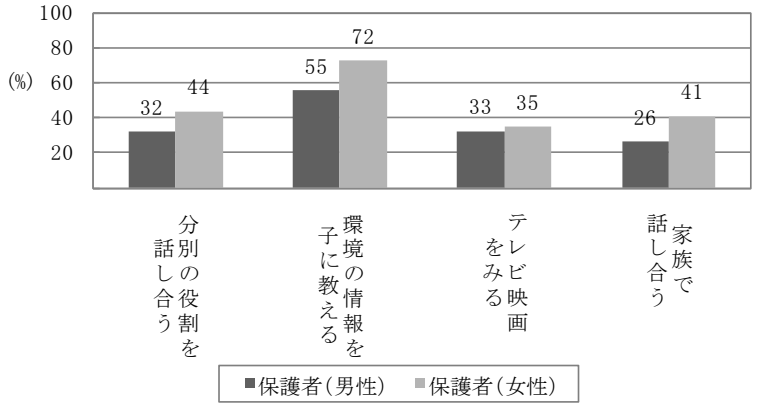

図 5.3　家庭内での環境問題の取り組みに関する保護者の認知

上記 4 つの認知と生徒の認知については、「家族でごみ問題や環境問題に関するテレビや映画をみる」と保護者が思っている家庭ほど、生徒は「自分の家では熱心に環境問題に取り組んでいる」と思っている傾向がみられたが、他の変数との関連はみられなかった。このことから、保護者が家族で話をしていると思うことは、家庭内での取り組みに関する生徒の認知にはそれほど影響をもたず、一緒に環境問題に関するテレビなどを見ることの方が、生徒の家庭内での取り組みの認知には影響を持つ可能性があることがわかった。

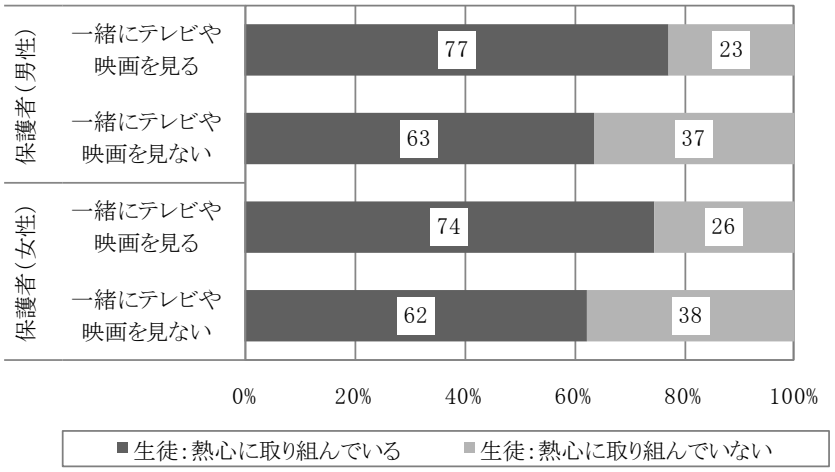

図 5.4　家庭内における保護者との行動と生徒の家庭の取り組みに対する評価

[4] 各パーセントは、家庭内で取り組みをしていると「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した人を合計したものである。

5.3　保護者の環境教育の考え方と生徒の行動

家庭における保護者の環境教育の考え方と、生徒の実際の行動というのは、どのように結びついているのだろうか。このことを検討するために、まずは保護者が（1）環境に配慮した行動については親が手本を示すべきだ、（2）親の環境に配慮した行動が子どもに大きな影響を与える、（3）環境配慮行動は学校教育が中心となって教えるべきだ、と思うかどうかを尋ねた（図5.5）。男性、女性どちらの保護者も、ほとんどが「環境に配慮した行動については親が手本を示すべきだ」と考え、「親の環境に配慮した行動が子どもに大きな影響を与える」と考えていることがわかる。また、「環境配慮行動は学校教育が中心となって教えるべきだ」と考えている保護者は男女ともに4割前後となっており、多くの保護者が家庭における環境教育を重視しているといえるだろう。

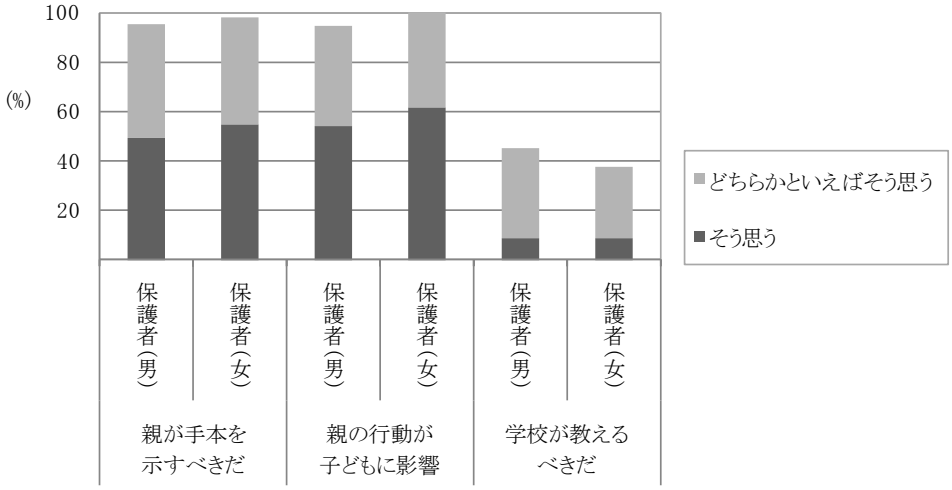

図 5.5　環境保護のありかたに関する保護者の考え方

このような保護者の意識と生徒の行動はどのように結びついているのだろうか。図 5.5 で示した3つの考え方のうち、「親が手本を示すべきだ」「親の行動が子どもに影響」という意見に対して「そう思う」と保護者が考えているかどうか、また、「学校が教えるべきだ」という意見に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と保護者が考えているかどうかと、生徒のごみ分別行動[5]の実行（「よくする」＋「時々する」）の関係を検討した。分析の結果、環境問題は学校が中心となって教えるべきだとは思っていない保護者（男性）の家ほど、また、親の行動が子どもに影響すると思う保護者（女性）の家ほど、生徒はびん等を洗うなどをよくしていることが分かった。また、親が手本を示すべきだ、親の行動が子どもに影響すると思う保護者（女性）の家ほど、生徒が資源をよく分別している。しかし、保護者の環境教育の考え方と、新聞等をひもでまとめたり、資源をステーションに持っていったり、牛乳パックをスーパーに持っていくなどの生徒の行動とはとくに関連はみられなかった。以上のことから、ごみ分別に関する行動であっても、保護者の環境教育に対する考え方が影響を与える行動とそうではない行動があることが明らかになった。

[5] ごみ分別行動については、「ビンや缶、ペットボトルなどを洗う」「資源を分別する作業をする」「新聞や雑誌などをひもでまとめる」「ごみステーションに資源を持っていく」「スーパーに牛乳パックなどを持っていく」を用いている。

６．環境意識の構造

6.1　環境問題に対する考え方

図 6.1 に示したのは、環境への意識をさまざまな側面から尋ねた問への回答である（4 段階で回答してもらったうち、肯定的な回答の比率）。「自然にはそれ自体の価値がある」、「自然環境が破壊される様子を見るのは悲しい」、「手つかずの自然を守ることが重要」の 3 項目は、環境それ自体への意識を測っている[6]。これについては、中学生も保護者も、性別に関わりなく 8 割以上が肯定している。人間の生活と環境問題の関係について尋ねた 3 項目では、「人類の生存のために、自然を保護することが重要」、「環境破壊が人間の生活を脅かすことが心配」を肯定する回答は 8 割を超えているが、「環境問題の解決のためなら、生活が不便になってもかまわない」と答えた人は 3 割から 4 割程度となっている。

これらについて保護者と生徒間および男女間の違いを見ると、全般的には、中学生よりも保護者、男性よりも女性で、環境への意識が高い項目が多いようである。ただし、「手つかずの自然」や「生活不便でもかまわない」は、男性のほうが「そう思う」比率が高くなっている。

環境問題への無関心を測る 3 項目では、保護者世代よりも中学生、女性よりも男性で、「環境問題のことはよくわからない」、「私は環境問題には関心がない」、「天然資源の枯渇は、皆が考えているほど深刻ではないと思う」と答える傾向がある。「環境問題はよくわからない」という中学生が男女とも 3 割強を占めており、男子では 3 割弱の生徒が「関心がない」と答えている。

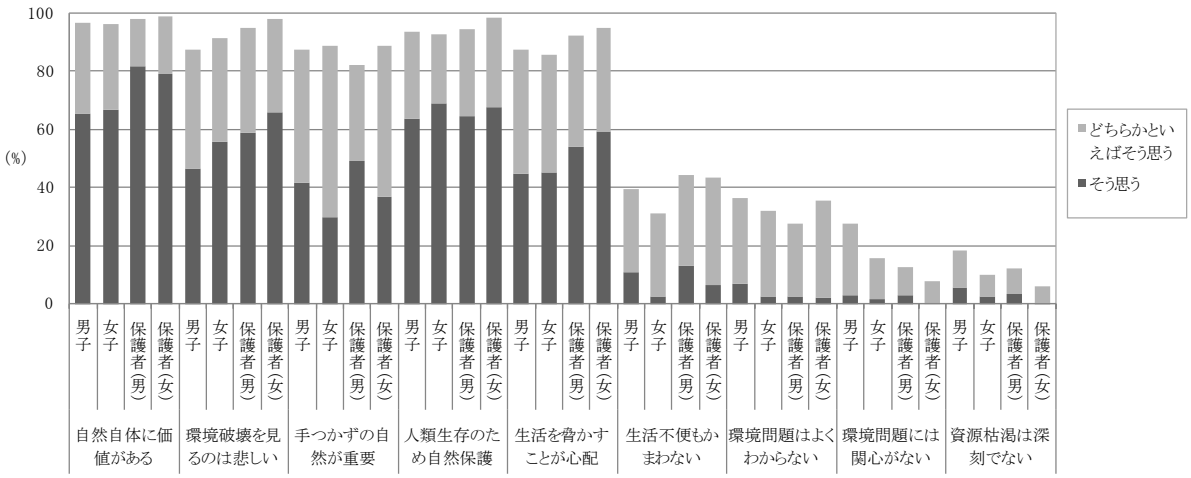

図 6.1 環境への意識（中学生と保護者，男女別）

[6] ここで取り上げた環境問題に対する意識を回答の類似性を基に統計的に分析してみると、ここでの分類とは少し異なる分類となった。この点については、今後詳しく分析していく。

これらの項目について、保護者と生徒の意識の関連を調べてみた。全般的に関連は弱いが（環境問題に限らず、一般的に、保護者と生徒の間よりも保護者間の意識のほうが似ている傾向にある）、一部の項目では関連が見られた。図 6.2 に示したのは、「環境問題のことはよくわからない」への回答について、保護者（女性）と男子生徒の回答の組み合わせを示したものである（ここでは関連を明確に示すため、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」と、「そうは思わない」にまとめている）。保護者（女性）が「環境問題のことはよくわからない」と思わない場合（つまり、保護者（女性）が環境問題について理解していると感じている場合）、男子生徒も環境問題を理解していると答える傾向がある。

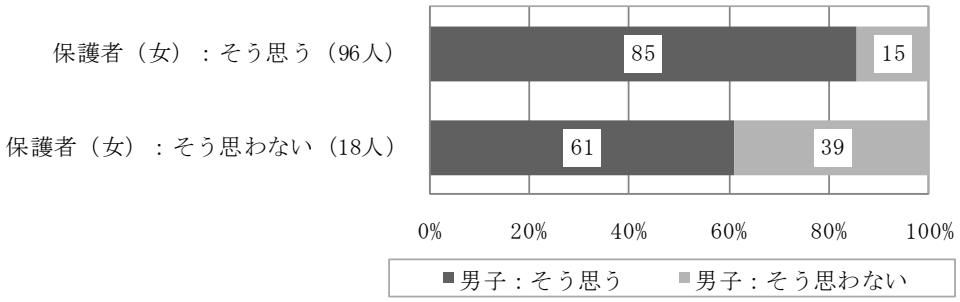

図 6.2 「環境問題のことはよくはよくわからない」への回答（保護者（女）と男子）

また、図 6.3 に示したように、「人類の生存のために、自然を保護することが重要である」という質問についても、保護者（男性）と女子生徒の回答に関連が見られた（ここでは「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そうは思わない」にまとめている）。

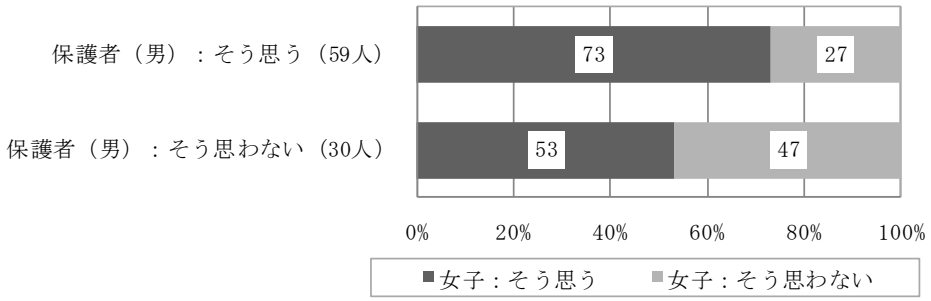

図 6.3 「人類の生存のために、自然を保護することが重要」への回答（保護者（男）と女子）

6.2　環境における公正さ意識

図 6.4 は、環境問題における公正さへの意識（環境問題をどのような空間的・時間的な範囲で考えるべきか）を尋ねた 3 つの質問について、肯定的な回答の比率を示したものである。「人間以外の生き物のことも考えて行動することが大切だ」、「皆のために、天然資源をきちんと管理することが重要だ」の 2 つについては、肯定的な回答が 9 割を超えている。「将来の世代のために自然を残すことは大切だが、私たちの世代の生活のほうが大切だ」に関しては、「そう思う」という回答は少ないが、中学生では「どちらかといえばそう思う」比率が多くなっている。

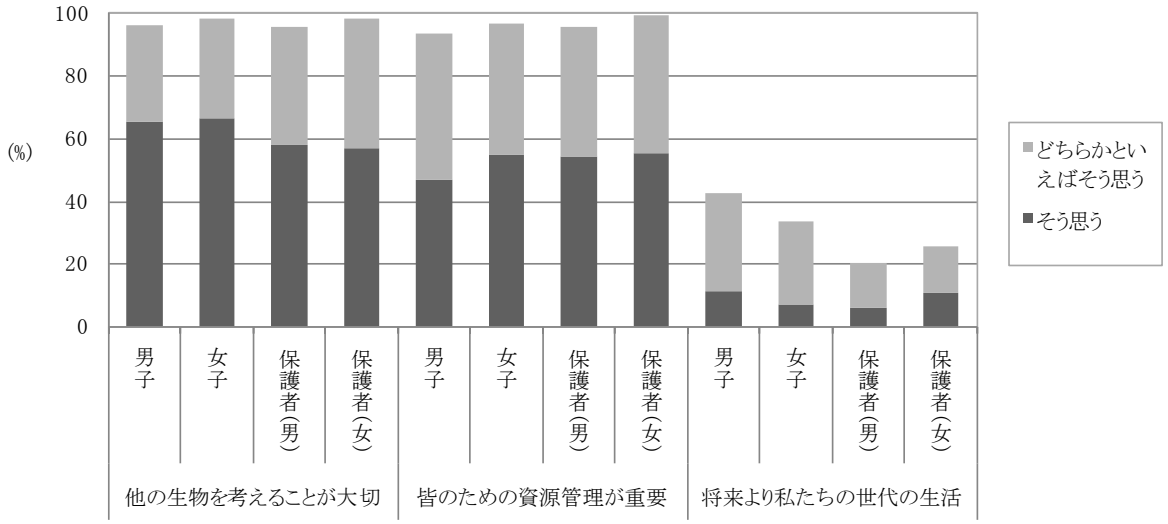

図 6.4　環境問題における公正さへの意識（中学生と保護者，男女別）

ここでも、保護者と生徒の間の意識の関連を調べてみた。図 6.5 は、天然資源の管理について尋ねた質問について、保護者（男性）と男子生徒の回答を示したものである（ここでは「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そうは思わない」にまとめている）。保護者（男性）が「皆のために、きちんと資源管理をすることが重要だ」と考えている場合、男子生徒も同じように考える傾向がある。

ただし、この質問でも保護者と生徒の意識の関連は弱いものであった。今回の調査ではさまざまな観点から環境への意識を尋ねているので、どのような側面で、またどのような条件で両者の意識の関連が高くなるのかについて、今後分析していく必要がある。

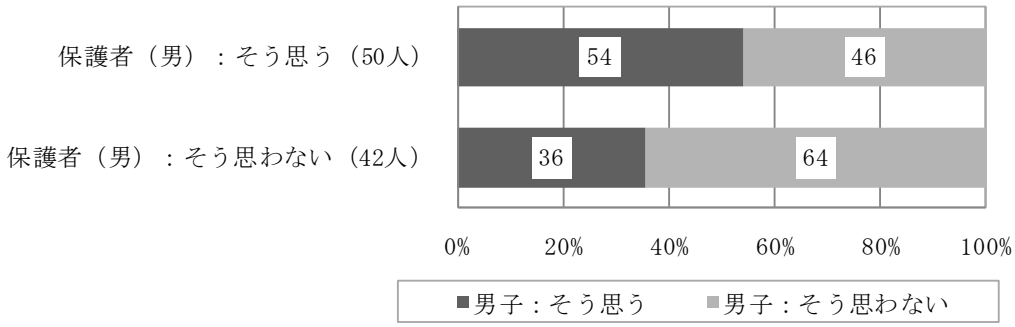

図 6.5「皆のために、天然資源をきちんと管理することが重要だ」への回答（保護者（男）と男子）

７．その他

7.1　分別ボランティアに関する意識

ボランティア活動として行うごみの分別活動に関して、「活動に参加するのが楽しい」「自分は熱心に参加している」「環境問題に対する知識が増える」「地域の人と仲良くなれる」と生徒がどの程度思っているのかを尋ねた。いずれも、「どちらかといえばそう思う」との回答が最も多く、順に、42%、44%、45%、43%であった（図 7.1）。「地域の人と仲良くなれる」で次に多かった回答は「そう思う」の 40%である。それ以外の 3 項目では「どちらかといえばそう思わない」であった（活動参加楽しい：35%、熱心に参加：29%、知識が増える：26%）。

「自分は熱心に参加している」「地域の人と仲良くなれる」に関しては性別とそのような考え方に関連が見られ、女子の方が男子より肯定的な回答をする傾向がみられる。

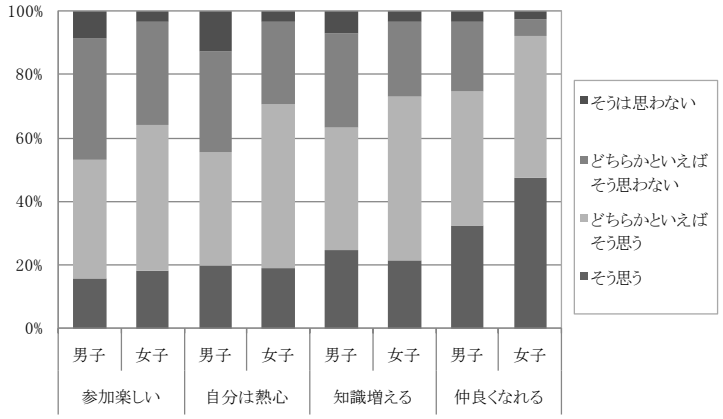

図 7.1　ボランティア活動としての分別作業に対する考え方

7.2　好きな科目

図 7.2 は生徒の好きな科目を示したものである。保健体育、音楽、技術・家庭科が上位に並んだ。性別ごとにみると、社会と英語以外は顕著な性差がみられた。音楽、技術・家庭科、国語、美術の４教科は女子の方が男子より「好き」との回答が多い傾向がみられ、保健体育、理科、数学では「好き」との回答が男子の方が女子よりも多い傾向にある。

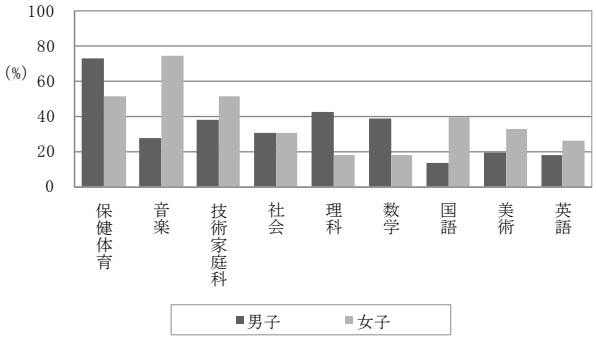

図 7.2　好きな科目

８．まとめ

【環境学習の取り組みと効果】

- 「水俣病に関する学習」には生徒の半数以上が「一生懸命に取り組んでいる」と回答し、「教科の中で習う環境問題」「総合学習の中で勉強する環境問題」「授業以外の時間に行う環境に関する活動・取り組み」では、「まあまあ一生懸命取り組んでいる」という回答が多い。また、女子のほうが男子よりも一生懸命に取り組む傾向がある。

【生徒が取り組んでみたい環境学習とその方法】

- 生徒が一番関心を持っているテーマは地球温暖化、次がごみ問題である。
- 文系科目（国語・英語・社会）が好きな生徒は、生物多様性により強い関心をもっているのに対して、理系科目（数学・理科）が好きな生徒は、水質汚濁や大気汚染、海洋汚染などのテーマに関心をもっており、その他の科目（技家・保体・音楽など）が好きな生徒は、地域づくりに関心をもっている。

【環境配慮行動実行状況とその評価】

- 生徒は「スーパーに牛乳パックを持っていく」ことはあまりないが、「ビンや缶、ペットボトルなどを洗う」「資源を分別する作業をする」「新聞や雑誌などをひもでまとめる」「ごみステーションに資源を持っていく」行動については半数近くがよくしており、時々するも加えると、8 割前後の生徒が学校や地域でごみ分別行動に関わっている。
- 普段行っている環境配慮行動のうち、生徒の回答で実行度が高かったのは「家の中で使っていない場所の電灯を消す」「歯磨きするとき水を流し放しにしない」「ごみを出さないように食事を残さず食べる」「自分の部屋の冷暖房を控えめにする」である。
- 一般に女子の方が熱心な傾向があるが、男子の方が高い実行率を持つ行動（食事を残さない、冷暖房を控える）もあった。
- ほぼ同様の傾向は保護者の回答にも見られた。
- ごみ分別および環境配慮行動全般に関する行動について、生徒と保護者の間の相関を調べたところ、あまり大きな関連はみられなかった。

【意識と行動の関係】

- 男女どちらの保護者も、ほとんどが「環境に配慮した行動については親が手本を示すべきだ」と考え、「親の環境に配慮した行動が子どもに大きな影響を与える」と考えており、多くの保護者が家庭における環境教育を重視している。
- ごみ分別に関する行動であっても、保護者の環境教育に対する考え方が影響を与える行動とそうではない行動がある。

【環境意識の構造】

- 全般的には、中学生よりも保護者、男性よりも女性で、環境への意識が高い項目が多いが、「手つかずの自然」や「生活不便でもかまわない」は、男性のほうが「そう思う」比率が高くなっている。
- 「将来の世代のために自然を残すことは大切だが、私たちの世代の生活のほうが大切だ」に関しては、保護者でも中学生でも「そう思う」という回答は少ないが、中学生では「どちらかといえばそう思う」比率が高い。

以上